令和三年度　第二回例会

観世流

緑泉会

令和三年
九月十九日（日）
午後一時開演
喜多六平太記念能楽堂

「千手」シテ 坂 真太郎（撮影 吉越スタジオ）

「鵜飼」シテ 津村 禮次郎（撮影 吉越スタジオ）

お客様各位

令和三年五月現在緊急事態宣言は月末に延長されましたが、能公演につきましては見所半数での開催が認められています。私たちはコロナ収束を待たず、コロナと共に活動する方法を探らなければなりません。感染対策を施しつつ、文化の継続に努めて参ります。

見所にお運びくださる皆さま、お一人お一人が、伝統の継承の力となります。また、見所の皆さまと共に、能による心身の充実を目指して参ります。

何卒宜しくお願い申し上げます。

能 Noh ……千手 Senju ……中所　宜夫

狂言 Kyougen …月見座頭 Tsukimizatoh ……大藏　吉次郎

能 Noh ……鵜飼 Ukai ……桑田　貴志

【お客様へのお願い】

・ご入場の際はマスクをご着用の上、入口にてアルコール消毒と検温にご協力下さい。
・37.5℃ 以上の発熱や咳、嘔吐などの症状がある場合、入場をお断りいたします。
・チケットの切り離し部分に、お名前とご連絡先（メールアドレス、または電話番号）をご記入下さい。未記入の場合は、入場の際に記帳をお願い致します。
※万一、来場者ならびに出演者、スタッフに感染の疑いが生じた場合、所轄の保健所へ来場者情報を提出する場合がございます。
・当日の社会状況により、使用可能な座席の指定ならびに館内での会話・飲食などの制限を致します。スタッフの指示に従って下さい。
・上演中も換気のためにロビーとの扉を開ける場合がございます。外部の音が障りになる場合もございますが、ご了承下さい。
・上演にあたり、演者も感染予防のための対策を講じますことをご了承下さい。

皆様の健康と安全を第一に考えております。ご不便をおかけすることもございますが、何卒ご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和三年度　第二回　例会　番組

能　**千手**

平重衡　鈴木　啓吾
千手前　中所　宜夫
狩野介宗茂　村瀬　慧
後見　新井　麻衣子
奥川　恒治
大鼓　亀井　広忠
小鼓　飯田　清一
笛　松田　弘之
地謡　杉澤　陽子
坂　真太郎
永島　充
佐久間　二郎
中森　健之介

【休憩十五分】

狂言　**月見座頭**

座頭　大蔵　吉次郎
上京ノ者　大蔵　教義
後見　上田　圭輔

仕舞　**雨月**　中入前　津村　禮次郎
石井　寛人
藤村　答

敦盛　キリ　永島　充
佐久間　二郎
中森　健之介
河井　美紀

三井寺　墨　敬子

【休憩十分】

能　**鵜飼**

閻魔大王　尉　桑田　貴志
旅僧　野口　琢弘
従僧　則久　英志
里人　榎本　元
後見　河井　美紀
坂　真太郎
大鼓　亀井　洋佑
小鼓　森　貴史
太鼓　澤田　晃良
笛　小野寺　竜一
地謡　筒井　陽子
鈴木　啓吾
中森　貫太
奥川　恒治
吉留　敬高

附祝言

【終了予定　午後四時三十分】

許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。
演能や他のお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場合によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

能…千手（せんじゅ）

最初に登場する平重衡（ツレ）は、清盛の五男。武勇に勝れ、眉目秀麗宮中の覚えめでたく父母に愛された。南都攻撃の際に大仏殿を焼き旧勢力の怨嗟を集め、一ノ谷の合戦で捕えられた今、鎌倉で頼朝の詮議を受けている。身柄を預かる狩野介宗茂（ワキ）は、重衡に同情し、頼朝の言明もあり丁重な扱いに努めている。千手の前（シテ）は頼朝重宝の遊女だが、前日に重衡の身支度を世話をするよう遣わされ、頼朝に重衡出家の希望を伝えたが、叶わぬとの事で、この日は慰めのための琵琶琴を整えて重衡を再訪する。春の雨が陰鬱に降り続いている。

対面を躊躇する重衡だが、宗茂は千手を招き入れる。流謫にあっても重衡には都の風雅が漂っている。出家の望みはやはり叶わないと知り、力を落す重衡を千手は慰めようとするが、重衡は沈んだままだ。宗茂が盃を勧めるのに合わせて「羅綺の重衣たる情けなき事を機婦に妬む（薄衣も重ねれば重くなるのは当然で織女を責めても理不尽である）」と北野すなわち菅原道真の詩を朗詠するが、これは南都焼打の責めを一身に負う重衡への思いとともに、既に天神となった道真がこの詩を詠ずる人を助けるとの俗言を恃んでのことだった。「今生の望みなし、ただ来世の便こそ」と言う重衡に、今度は「十悪と言うとも引摂す」と極楽往生を約束する詩を朗詠する。

千手は重衡の来し方を曲舞に語り、囚われの身のこの雨のひと夜を、数行虞氏（項羽の愛姫）が四面楚歌の声に囲まれて舞った夜に重ね、千手には多くの袖があるので幾度でも舞を舞いましょうと、序之舞を舞う。更に、一樹の蔭や一河の水も皆前世からの縁で繋っていることを、白拍子風に面白く数え上げると、重衡もその面白さに誘われて琵琶を奏で、すかさず千手が琴を合わせると、二人の演奏に夢のような時は瞬く間に流れた。

夜が明けると、重衡は勅によって都に召喚されて行く。二人は引き離され、去る者も見送る者も悲しみにうちひしがれている。

狂言…月見座頭（つきみざとう）

仲秋の明月の夜、一人の座頭（シテ）が野辺に出て虫の音に耳を傾けていると、上京の男（アド）が通りかかり声をかける。古歌を吟じたり舞を舞ったりと意気投合した二人。しかし、別れた後に…。

仕舞

雨月　中入前（うげつ　なかいりまえ）

住吉で行き暮れた西行法師が宿を借りた老夫婦は、雨月の風情を楽しむために軒の破れも葺かずにいる。折から風が吹き、雨かと怪しむが月は明るい。砧を擣てば音は哀切に響き、風に落ちる色とりどりの落葉の露には月影が宿る。掻き集めて見れば、土に湿っていて、雨の名残を見るようだ。

敦盛　キリ（あつもり）

平敦盛の幽霊は、一の谷の合戦で熊谷次郎直実に討たれた有様を、その直実が出家した蓮生法師の夢中に現れて再現し、供養を喜び、更なる弔いを頼む。

三井寺（みいでら）

生き別れた子を求めて三井寺にやって来た狂女は、仲秋の明月に誘われ、住僧の制止を振り切って鐘を撞く。鐘の音に涅槃経の雪山童子の偈「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」の響きをなぞらえれば、その音は煩悩を払い、真如の月と心静かに対峙している。

能…鵜飼（うかい）

安房の清澄の僧（ワキ）が甲斐国行脚の途中石和川で日暮となる。里人（アイ）に宿を乞うが禁制を理由に断られ、川崎の御堂に休むこととなる。里人に「夜な夜な光るものが上る」と脅かされ、「法力をもって泊るので心配無用」と答えた僧の前に現れたのは、鵜使いの老漁師（前シテ）だった。老人は殺生に明け暮れる身の業を嘆きつつ、鵜を休ませようと御堂に上ってくる。僧と言葉を交すが、他の活計を勧められても、今更難しいと答えてにべもない。すると従僧（ワキツレ）が以前に同じような鵜使いと出会い、同じように殺生の罪を説いたことがあったと語ると、老人はその鵜使いは死んだと伝える。その子細を語って聞かせるうちに、ついに自分がその鵜使いの亡者だと告げる。老人は僧に請われて、生前の鵜使いの有様を活き活きと再現して見せ、月の出と共に漁を終えて帰って行く態にて、暗闇の中に姿を消す。

訪ねて来た里人に鵜使いのことを詳しく聞き、河原の石に一文字ずつ法華経の経文を書きつけて川に沈め、鵜使いのことを弔っていると、閻魔大王（後シテ）が現れる。くだんの鵜使いは殺生の罪を書きつける鉄の札は無数にあるが、善行を書きつける金紙は真っ新のままで、地獄に落とすのが当然のところ、尊い僧に宿を貸した功徳によって仏所に送ることとすると語る。見れば空は雲もなく真如の月が明るい。このように悪業を重ねても法華経の利益は大変深く、成仏することが出来るのだ、と閻魔は罪人を極楽へ送って行く。

2021.
9.19（日）PM1:00（開場 12:00）
喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎 4-6-9
☎ 03-3491-8813
JR、東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩７分
香港園手前の道を左折し約 400m 直進、杉野学園体育館手前を左に入る。
※ 駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。

入場料

会員券（年4回）	一般 20,000円	学生 10,000円
1回券（当日券）	一般 6,000円	学生 3,000円

申込先：各出演能楽師または緑泉会まで

中所　宜夫　TEL&FAX　042-550-4295
桑田　貴志　TEL&FAX　03-3643-0891

令和3年度 第3回例会 12月18日（土）

能… 殺生石 Sessyouseki …… 河井　美紀
能… 安達原 Adachigahara …… 新井 麻衣子